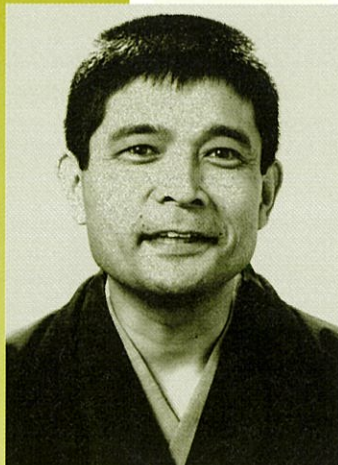




柳家小三治 笑福亭松喬

笑福亭三喬

腹話術
川上じゅん

*
解説／相羽秋夫

*
お囃子／なにわの会

2004年

5月24日【月】18:30開演 (18:00開場)

茨木市クリエイトセンター・センターホール

JR茨木駅から東へ徒歩10分、阪急茨木市駅から西へ徒歩10分、茨木市市民会館北200m

●入場料

全席指定 1階席=3,000円 2階席=2,500円(消費税込み)
割引=65歳以上、18歳以下、障害者及びその介護者は500円引き
就学前のお子様はご遠慮ください

●チケット販売所(2/25発売)

(財)茨木市文化振興財団 072-625-3055 / JA茨木市各店舗 072-627-7762 (本所総務課)
フミレコード阪急茨木市駅前店 072-626-3723 / 朝日野村北摂販売(株) 072-643-8424
ローソンチケット・Lコード予約 0570-06-3005 (Lコード58573) ※ローソン各店舗でも直接購入できます
チケットぴあ 0570-02-9999・Pコード予約 0570-02-9966 (Pコード 352-152)
※ローソン・ぴあでは割引の取扱いはありません。

●お申し込み・お問い合わせ

072-625-3055 (財)茨木市文化振興財団

月～金、8:45～17:15、土・日・祝日休業 / 〒567-0888 茨木市駅前四丁目6番16号クリエイトセンター1階

※電話予約もお受けしますが、お席の希望はお聞きできません。予約後は、1週間以内に財団事務局でご精算ください。

※予約チケットの郵送をご希望の場合は、〈チケット料金+郵送料430円〉を現金書留でご送金ください。到着後ご返送いたします。

※当財団での窓口販売と電話予約が競合した場合は窓口販売を優先いたしますので予めご了承ください。

山一治 松喬

東西落語の夕べ

小三治・松喬～東西落語の夕べ

●2004年5月24日(月)18:30開演／18:00開場●茨木市クリエイトセンター・センターホール●全席指定●1階席3,000円／2階席2,500円／

65歳以上、18歳以下、障害者及びその介護者は500円引き ●お申込み・お問い合わせ：(財)茨木市文化振興財団072-625-3055クリエイトセンター1階

東の小三治、西の松喬

落語は京都で産声を上げた。

裏寺町通り蛸薬師を少し上がった所に現存する誓願寺の法主である安楽庵策傳が、「落とし咄」を考案し、露乃五郎兵衛という男が、やはり京都の北野天神の境内で演じてみせたのが、その始まりである。

その後、この「落とし咄」が、大坂や江戸に流布した。江戸五代將軍綱吉の頃である。

そして、京都と大坂が合わさって「上方落語」に、江戸の伝統が「東京落語」にと、二つの大きな流れとなつて今に伝わっているのである。

同じ母親から生まれた二人の子どものような存在の「上方落語」と「東京落語」である。落語の芸としては東西の差は全くない。

しかし、多少演出の違いはある。

まず、「上方落語」には、「はめもの」と呼ばれる効果音や効果音楽が入る。全ての演目に入るわけではないが、数からいったら多い。

「東京落語」では、「正本・芝居断」や「怪談断」以外は、演者の話芸だけで終始する。一言で表現すると、派手でぎややかな出来上りを求める「上方落語」に対し、じつくりと語り込むのが、「東京落語」の特色と言えようか。

第二点は、舞台装置の有無である。「上方落語」は、「見台」「膝かくし」「小拍子木」と呼ばれる三つのセツトを前にして演ずるが、「東京落語」は、座布団に座って喋るのを常としている。

上方でも、最近はこの装置を使わない例が多く、見た目での変化が付かなくなってきた。

断の内容としては、商人の街大坂を反映して、商家を舞台に旦那や丁稚が出てきたり、道楽息子が登場する断が、「上方落語」には多い。

「東京落語」は、武士が登場して庶民にやつつけられたり、大工を筆頭とする職人にまつわる断がたくさんあるのも、二つの街の態様を写し出している。

食べ物でも、うどん、てっちり、餅、箱ずしが描かれる「上方落語」。そば、あんこう鍋、さんま、にぎり寿司の登場頻度が高い「東京落語」。

ここでも東西の風土、習慣などの差が、断の内容の差になる。落語がいかに庶民生活をリアルに描いているかの証明になる。



相羽秋夫

演芸評論家
大阪芸術大学教授

細かく見ていけば、まだまだ東西落語の違いはあるが、それは皆さんに捜していただくとして、今回の催しの第一のポイントは、めったに機会のない東西落語を聴きくらべることである。

その東西の断を演じる落語家をご紹介します。

まず遠来の客、十代目の柳家小三治である。早くから、本格の話芸の持ち主として注目されている。

小三治という名前は、師匠の小さんの前名であり、人間国宝であった五代目小さんの名跡を継ぐ人材として、大きな期待が寄せられている。

一九三九(昭和十四)年に、東京都新宿区で生まれた。都立青山高校卒業後、この世界に入つて、小たけ、さん治を経て現在に至る。

独特の「まくら」は、何度聴いてもおもしろい。果たして、今回どんな「まくら」を用意してくれているのか、今から楽しみだ。若い頃はオートバイを乗りまわしたり、機械をいじったり、趣味の多さにも定評がある。

一方、六代目笑福亭松喬も、上方落語界の期待の星である。

播州(兵庫県)小野市の生まれだけに、ナマリの克服に苦勞したが、たゆまぬ努力で今日を築き上げた。

理容師になることを夢見たが、後に師匠となる六代目松鶴の芸に触れて、人生の方向を転換した。

一九五一(昭二六)年の生まれだから、小三治よりひとまわり若い、全体に年齢層の低い上方落語界にあつては、堂々たる地位を占めている。

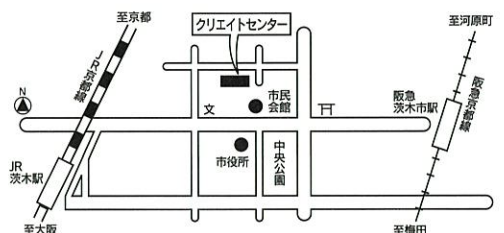
最初、鶴三と称したが、師匠の遺言によつて六代目松喬を襲名した。

色紙に描く絵はプロ級の腕前で、個展を開いたほどだ。また魚釣も好きで、こちらも趣味人として知られている。

この二人の前座をつとめるのは、松喬の一番弟子の三喬である。鶴三時代の入門なので笑三と言ったが、後に現在名になった。将来の大成が予想される。

「膝がわり」(トリの前に出る演者)は、茨木市在住の腹話術、川上じゅんである。のぼるの二男で、父の芸に自分の創意を加えて著しい成長を遂げている。

(敬称略)



(財)茨木市文化振興財団

〒567-0888 茨木市駅前四丁目6番16号クリエイトセンター1階／TEL072-625-3055 FAX072-625-3036
クリエイトセンター(茨木市市民総合センター) JR茨木駅から東へ徒歩10分、阪急茨木市駅から西へ徒歩10分



ゴウダ株式会社

全国7事業部 15工場

<http://www.goda-j.co.jp>

本社

大阪府茨木市東福井1-12-13

TEL 072-640-2200(代) FAX 072-640-2244

東京営業本部

東京都千代田区神田和泉町1-6-1 インターナショナルビル

TEL 03-5825-7360(代) FAX 03-5825-7406

工場所在地

大阪／滋賀／名古屋／静岡／富士／関東／つくば／東北